

# 架蔵中将姫・当麻曼荼羅縁起類関連資料について

## —解説並びに翻刻—

稲垣 泰一

これまで既で紹介した『當麻畧傳』（延宝五年写）<sup>①</sup>、及び『中將法女比丘尼傳記』（無刊記、版本）に引き続いて、本稿では、架蔵の中將姫・当麻曼荼羅縁起類関連資料について、簡単な解説とともに、翻刻を付して紹介することとする。

### 〔解説〕

#### 一

まず最初に、（Ａ）『雲雀山中將法如縁起』を取り上げる。書誌を次に記しておく。

江戸後期の無刊記、版本一冊。縦二十四・七糎、横十六・二糎。料紙は楮紙。共紙表紙で、全七丁

（表紙を含む）。袋綴。仮綴。本文は一面十行。漢字、平仮名交り文で、漢字には部分的に平仮名の振り仮名を施す。一丁表（共紙表紙）は図版で、四周双辺の子持ち枠（内側細線）、縦二十・四糎、横十四・一糎の匡郭で囲む。図版は堂舎、山岳景、古跡等の絵図。また、中央に「雲雀山中將法如縁起」と刷り外題。それを四周双辺の枠（外側細線）、縦八・三糎、横二・五糎の匡郭で囲む。柱刻は一（七）と丁数を印刻。最終丁（七丁）表の末尾に奥付として、「稱讚浄土經書寫之地／紀州在田郡系我莊雲雀山得生寺什記」と印刷する。

本縁起は和歌山県有田市系我町中番（なかばん）に所在する雲雀山得生寺の縁起である。その内容の概ねを記すと次の通りである。

- ① この雲雀山（ひばりやま）は、聖武天皇の御宇、横佩の右大臣豊成公の息女、中将の内侍が十三歳の時に、継母の讒言によって、奈良の都より捨てられて、三年の間に、称讃浄土經一千巻を書写した旧跡である。
- ② 中将姫は九歳の時に、葛城山の地獄谷に捨てられたが、召し返される。十二歳の時に大和を去り、遠く紀伊の国雲雀山に捨てられた。しかし、姫君の生命を助けた家来の子藤春時は、妻とともに庵を結び、忍んで姫君を養育した。
- ③ 姫君が十四歳の時に、春時は重病を患って死亡した。姫君は春時のために石上を机として、称讃浄土經一千巻を書写する。
- ④ 姫君が十五歳の時に、父豊成公がこの山に狩獵のために登って来る。豊成公ははからずも姫君と対面し、姫君は再び都に召し返される。
- ⑤ この姫君が住んだ庵の跡は寺となり、得生寺と号した。
- ⑥ 姫君の詠んだ和歌二首。  
大和の国宇田郡にも日張山（ひばりやま）という所がある。その地は姫君が受戒の後、念仏三昧をした旧跡である。
- ⑦

- ⑧ 山居の語があり、これを記す。
- ⑨ 宇田郡山居の語には、剃髪以後の道德を著し、在田郡山居の和歌には、剃髪以前の風詠を残している。両国の「ひばり山」は剃髪前後の旧跡である。
- ⑩ 姫君が書写した称讃浄土經は、浄土三部經の中の阿弥陀經と同本異訳の經である。これを書写したり、読誦する時は、諸仏が護念するので、護念經ともいう。
- ⑪ 姫君は九歳の時から毎日六巻を読誦し、十四歳の春からは、毎日三巻ずつ書写して、終に一千巻を書写した。
- ⑫ 姫君は十七歳の夏に、当麻寺で大曼荼羅を感得する。これは四百十三字を織り付けたもので、織付の縁起ともいう。
- ⑬ 姫君は天平宝字七年六月十五日、十七歳で当麻寺で剃髪し、生身の阿弥陀仏を拝もうとの大誓願を立てる。
- ⑭ すると、一人の禪尼が現れ、百駄の蓮糸を繰り、井戸を掘ってそれを五色に染めた。この禪尼は阿弥陀仏の化身である。
- ⑮ その後、また一人の化女がやって来て、亥の刻から丑の刻までの三時をかけて、一丈五尺の曼荼羅、

糸我山で書写した浄土經の袋一百を織り上げた。  
この化女は觀世音菩薩の化身である。

⑬ 二十三夜の暁に、これを感じた中將法如は勢至菩薩の化身である。

⑭ つまり、阿弥陀仏、觀音・勢至菩薩が三女牀となつて現れたのである。

⑮ 源信僧都がこの地に来て、弥陀の像一千牀を刻んだ。

⑯ 永万元年には宗心大徳が住持して、大般若經一部を書写した。

⑰ 文亀の頃、寺を山より里に移した。これが今の得生寺である。

⑱ 里名も、住古は糸高（いとか）とも糸鹿（いとか）とも書いたが、中將法如十七歳の夏、当麻寺で曼荼羅感得の後に、糸我（いとか）と改めたのである。

⑲ 「糸我の十故」として、古跡を記す。

⑳ 光仁天皇宝龜六年三月十四日、法如二十九歳にして大往生を遂げる。

㉑ 御染筆の称讚浄土經三部のほか、多くの靈宝を掲げ、「雲雀山中將法如縁起畢」と結ぶ。最末尾には、奥付として二行が印刷される。

以上、本縁起の内容について略述した。本縁起にも記される通り、中將姫が遺棄された（へびり山）は、紀伊の国在田郡の雲雀山（得生寺が所在）と大和の国宇田郡の日張山（青蓮寺が所在）がある。それらについては、日冲敦子著ブックレット《書物をひらく》22『時空を翔ける中將姫』（平凡社、二〇二〇年二月刊）が実地調査を踏まえた上で、綿密な考察を行っている。詳しくはそれを参照されたい。

なお、築瀬一雄著『社寺縁起の研究』（勉誠社、平成十年二月刊）、中野猛編『略縁起集成』第五卷（勉誠出版、平成十二年二月刊）に翻刻が所見。

## 二

次に、（B）『當麻中將姫和讃』を取り上げる。書誌は以下の通りである。

明治十九年刊、版本一冊。縦二十四・三糎、横十六・八糎。料紙は楮紙。共紙表紙で、全六丁（表紙を含む）袋綴。仮綴。本文は二段組みで、一面八行。漢字、平仮名交り文で、漢字には平仮名の振り仮名

を施す。一丁表（共紙表紙）の中央に「當麻中將姫和讃」と刷り外題がある。それを四周双辺の子持ち枠（内側細線）、縦十四・八糧、横二・九糧の匡郭で囲む。二丁表の冒頭に「當麻中將姫和讃」の内題がある。最終丁（六丁）裏に、「明治十九年一月」の刊記、最末尾に「版木彫刻師 本町堺筋 志保山」と版元を刷る。

続いて、本書の概要について記す。最初に和讃について触れておく。和讃とは仏教歌謡の一つで、仏・菩薩や高僧などの徳行や教えを和語で称讃するものである。本書は中将姫の心性と徳行を褒め称える内容で、七五調、十二音の文言で、中将姫の誕生から現身往生までの生涯を、年齢を追って詠ずる記述になっている。以下に簡略にその内容について記す。

- ① 冒頭に内題があり、続いて「帰命當麻の曼陀羅は、本覚真如の都なり」の文言から始まる。
- ② 聖武天皇の時、横佩の大臣豊成公の息女中将姫は、長谷寺観音の化身として生まれた。
- ③ 誕生の時から、二歳、三歳、四歳の幼少時、姫君は西方浄土への信仰が篤く、毎日六巻の經文を誦する。

- ④ 五歳の時、実母の紫の前と死別した。
- ⑤ 六歳の時、継母の照夜の前に子供が生まれると、継母の姫君への憎悪が始まる。
- ⑥ 姫君は八歳になると、容顏美麗、知恵、芸能に勝れ、愛敬豊かに成長する。照夜の前の継子いじめが増大し、姫君は毒殺の難に襲われる。
- ⑦ 九歳の時には、照夜の前は家来の松井嘉藤太を呼び寄せ、姫君を紀伊の国雲雀山に連れ出し、殺害しよう命じる。
- ⑧ 松井は姫君の命を助け、雲雀山の奥に小屋を造り、姫君とともに昼は經文を書写、夜は念仏に明け暮れた。
- ⑨ 二年三カ月の後、姫君は不思議なことに父豊成卿と再会し、都に帰る。
- ⑩ 姫君は出家の志が深く、十六歳の秋に当麻寺で、実雅阿闍梨を師として剃髪した。そして、生身の阿弥陀如来を拝もうとの誓願を立てる。
- ⑪ すると、阿弥陀如来の化身の老尼が現れ、九十余駄の蓮茎から糸を繰り出し、それを染井の水につけて五色の糸とした。
- ⑫ やがて、老尼と長谷寺観音姫君とで、一夜三時の間に、曼陀羅を織り上げた。それは西方浄土の莊



巖をあらわしたものである。

### 三

- ⑬ その後、十三年を経て、宝龜六年三月十四日に、中将姫は二十九歳で現身往生する。その時には二十五菩薩が来迎し、姫君とともに浄土に帰って行ったのである。

(C)『和州石光寺縁起』について。

これは江戸時代末期の一枚刷りの縁起である。以下調査事項を記す。

以上が本書の内容の概略である。中将姫が長谷寺観音の化身であること、実母、継母、家来の名前が明示されているところに特色がある。これらの内容から判断すると、この和讃は、当麻寺で催される練供養会（古くは中将姫が現身往生した旧暦の三月十四日の一月後の四月十四日に行われていたが、現在は毎年五月十四日に挙行される）や、春・秋の彼岸会などの法会の際に、和讃を詠ずるテキストとして、販売、頒布されたものと考えられる。本書は明治十九年の刊記があるが、おそらくそれ以前、江戸末期以来版行されていたものであろう。

なお、河中一學著『當麻寺私注記』雄山閣出版、平成十一年十月刊）に中之坊本が、中野猛編『略縁起集成』第六卷（勉誠出版、平成十三年二月刊）に無刊記本が翻刻されている。

刷り版一枚。縦二十一・二糎、横三十八・一糎。

料紙は薄手の楮紙。冒頭に標題を「和州石光寺染寺縁起」と大字で刷る。本文は十八行。漢字、平仮名交り文で、漢字には大半、平仮名の振り仮名を施す。標題・本文を四周単辺の枠、縦二十三・九糎、横三十七・二糎の匡郭で囲む。

この一枚物は、奈良県葛城市に所在する石光寺（通称染寺）の縁起である。次にその内容を簡略に記しておく。

- ① 天智天皇の御宇に、この地に大光明を放つ、弥勒三尊の形をした石があった。
- ② 天皇はその地に寺を建立、弥勒菩薩像を造って安置し、石光寺と号した。
- ③ その後、淡路廃帝の御宇、天平宝字七年六月二十三日、当麻寺で中将法如尼公が、浄土の大曼陀羅を感得する。

④ その時に、一人の化尼が来現し、この地の井水で、蓮糸を五色の糸に染めあげた。それ故、その井戸を染の井、寺を染寺と呼ぶようになった。

⑤ また、その糸を懸けた桜の木は、昔、役の行者が仏法興隆の表示として植えたもので、染野の桜という。

石光寺（染寺）の創建については、文献上では、古くは九条家本『当麻寺流記』、護国寺本『諸寺縁起集』極楽反曼陀羅織日記の条、禅林寺本『和州当麻寺極楽曼陀羅縁起』、『元亨釈書』巻二十八禅林寺（当麻寺）の条などに見られ、前記の①～⑤の各項目と同一内容の記事が漢文体で記されている。また、国宝の絵巻『当麻曼荼羅縁起』上・下巻（光明寺蔵）には、上巻末に前記の各項目と同一内容の事柄が詞書に記され、井戸を掘る絵図や、光を放つ巨石、弥勒菩薩像の造立、染寺の御堂などの絵図が描かれている。すなわち、石光寺縁起は、中将姫による当麻曼荼羅感得にまつわる、いわゆる中将姫説話の伝承に付随するかたちで形成されてきたのである。そして、それは鎌倉時代、十三世紀中葉から室町時代の注釈書類を経て、江戸時代末期に至るまで伝承されてきたものと考えられる。

本縁起末尾には、中将姫を慕って念仏すれば、極楽往生疑いないと説いている。これはこの一枚物の縁起が石光寺、及び当麻寺の案内、宣伝用の刷り物として、法会などの際に頒布されたことをうかがわせる。

なお、石光寺周辺では遺跡の発掘調査が行なわれており、その成果は『当麻石光寺と弥勒仏 概報』（吉川弘文館、平成四年八月刊）として刊行されている。

また、別物ではあるが、類似の一枚物として『和州石光寺染寺由来』があり、築瀬一雄著『社寺縁起集の研究』（勉誠社、平成十年二月刊）に翻刻されている。

#### 四

（D）『中将姫由来 畧縁起』について。

これは江戸時代末期にかけての、一枚刷りの略縁起である。以下に調査事項を記す。

刷り版一枚。縦二十四・一糎、横三十四・二糎。

料紙は薄手の楮紙。冒頭に標題を「中将姫由来 畧縁起」と大字で刷る。本文は二十三行。漢字、平仮名交り文で、漢字には大半、平仮名の振り仮名を施す。標題・本文を四周单边の枠、縦二十・五糎、横

三十三・〇糧の匡郭で囲む。

この一枚物は、奈良県葛城市に所在する当麻寺の略縁起である。次にその内容について略記しておく。

- ① 聖武天皇の御宇に、横佩右大臣豊成公の息女中将姫は、継母の妬みから、武士によって、紀州在田郡鶴山（ひばりやま）で殺害されそうになる。
- ② 姫君は九歳の時から、毎日浄土経を誦誦していたが、残り三卷分誦誦のための命乞いをする。
- ③ 武士は姫君の命を助け、庵を結んで共に暮らす。
- ④ 父豊成公が狩りのため登山し、姫君と再会、都に連れ帰る。
- ⑤ 姫君は十七歳の時、当麻寺で実雅を師として剃髪し、中将法如と号した。
- ⑥ 中将法如は生身の阿弥陀仏を拝もうとの誓願を立てると、弥陀が現れ、百駄の蓮を用意するよう告げる。
- ⑦ 近江、大和、河内の三国より九十余駄の蓮が集まると、それを糸に繰り、染井で五色に染めた。
- ⑧ 孝謙天皇の御宇、天平宝字七年六月二十三日、化女、織女が来現し、一丈五尺の曼陀羅を織り上げた。

- ⑨ 化女は阿弥陀仏、織女は観音の化身で、曼陀羅は阿弥陀浄土の変相である。

- ⑩ 中将姫は二十九歳の時、光仁天皇宝龜六年三月十四日に、現身往生する。その時、二十五菩薩が来迎した。

以上、この略縁起は国宝の綴織「当麻曼荼羅」（観經变相図）制作にまつわる、いわゆる中将姫説話の伝承を簡潔に記したものである。この説話伝承は、継母による継子いじめ〈捨子物語〉を含むものであり、〈雲雀山系統〉のものである。継子いじめの説話伝承は、室町時代中期、玄棟撰述の『三国伝記』巻十一第二十七話に見られる。また、室町時代以降には、小形絵巻や奈良絵本の室町時代物語（中世小説・お伽草子）に記されたり、謡曲「雲雀山」などに取り上げられている。更に、談義本や注釈書類、江戸時代に至ると、一代記、伝記類へと発展、増幅して展開する。本略縁起はこの説話伝承を一枚物として、ごく簡潔にまとめ上げたものである。

また、この略縁起の末尾には、「今の練供養是なり」とある。これはいうまでもなく、現在も当麻寺で毎年五月十四日（古くは四月十四日）に催されている練供養会のことである。この一枚物は練供養会が行われる折簡、

当麻寺の案内、宣伝用のパンフレットとして頒布されたものであろう。

なお、中野猛編『略縁起集成』第五卷（勉誠出版、平成十二年二月刊）に「和州當摩寺中將姫 由来起<sup>（イ）</sup>」として同一内容のものが翻刻されている。

(E) その他、架蔵の一枚物の略縁起には（ア）『大和國葛下郡二上山當麻寺略縁起』、及び（イ）『當麻寺 略縁起』がある。また、銅版画図の一枚物（ウ）『和州當麻寺現境内見取圖』がある。これらについては、本稿では紙幅の都合上、解説・翻刻は省略し、図版のみを掲げた。

#### (注)

- (1) 拙稿『當麻畧傳』（延宝五年写）について―解説並びに翻刻―（「文教大学国文」第四十八号、平成三十一年（二〇一九）三月）
- (2) 拙稿『中將法女比丘尼傳記』について―解説並びに翻刻―（「文教大学国文」第五十号、令和三年（二〇二一）三月）
- (3) 中將姫説話の伝承と展開については、すでに（注）(1) (2) の拙稿でも触れている。

〔翻刻〕

凡例

一、本文（漢字、平仮名）、及び振り仮名（平仮名）はすべて原文通りとした。

一、字体は基本的に通行字体を用いた。漢字の異体字、俗字体、略字体などは正字体に改めた。

𠂔↓靈      𡗗↓喜      艸↓草

崩↓嶮      𠂔↓事      𠂔↓畢

一、慣用のくずし字については、次の通りとした。

𠂔↓給      𠂔↓也      𠂔↓事

一、旧字体はおおむね新字体（常用漢字体）に改めた。

當↓当      菴↓庵      陀↓陀      處↓処

一、次の仮名字体は平仮名とした。

ツ↓つ      ハ↓は      ミ↓み      ヤ↓や

一、訓点符号の一・二、レ点などはそのままとした。

一、不審な部分は右傍に（ママ）とした。

二、丁替り、表・裏は、丁数、オ・ウの順で、每半葉末尾に次のように示した。

「（三オ）      「（五ウ）」

一、読解の便を考えて、本文に適宜読点（、）を施した。

(A)

白山権現

雲雀山中將法如縁起

(外題 中央)

(四周双辺枠囲い)

机 石  
経 の 嶺

「(一オ)

紀の国在田郡雲雀山は、人皇四十五代聖武帝の御宇、横佩の右大臣豊成公の姫君中将の内侍、十  
三の御時継母公のさがしらによりて、奈良の都より捨られ給ふて、三とせが中に称讃浄土經二千  
卷書写し給ふ旧跡なり、抑姫君九才の御時、かつら木山地獄が谷へ捨られ給ひしが、勅によりて  
召かへされ、又十三の御時、和州を去、遠く紀のひばり山へ捨られ給へり、紀の国ひばり山は南  
は熊野、北は芳野、其間人跡たえし所なり、然るを、姫君のかしづき伊藤春時御命を助奉り、柴

の庵いはりを結び、密ひそかに都みやこの妻を召めしよせ、夫婦もろ諸とも此処しのに忍しのびて、養育やういくし奉りける、さて姫君十四歳の春のころ、春時が身に重おもき病やまひを受けてむなしくなりければ、姫君九歳の「(一ウ) 御時、悲母ひもの御為に授さづかせ給ひし、称讃浄土經一千卷書写の御願ましませば、今は春時が為にもとて、木の根せきしやうを机つくへとして、書写の御願はとげさせ給へり、十五歳の御時、父豊成公此山かりへ狩し玉ふける、はからずも姫君に対面たいめんして、再び都へ召かへさせ給へり已上当麻寺勅、筆縁起の略、其おはしませし庵の跡、つひに一字の僧舎と成、得生寺と号す、此に姫君の御歌二首あり、

なか／＼に山の奥こそ住よけれ草木は人の科をいはねば

糸か山いなりに見ゆる紅葉ばは秋の初の錦なりけり

糸か稲荷の記に曰、卅七代孝徳天皇白雉年中に、山より社を里に移して、糸鹿いとしか社とも稲生いなり社ともいふとあり、」(二オ)

将大和国宇田郡にも日張山ひばりやまといへるあり、こは受戒しゆかい已後念仏三昧の旧跡なり、則山居すなはちの語あり、○男女境界なければ愛欲の思ひなし、○妻子眷属なければ養育の望なし、○貧窮無福の身なれば盜賊の恐なし、○不断念仏を行すれば聖行の望なし、○木食草衣の身なれば諸人の煩をうけず、○長夜の暗に灯なければ己心こしんの月を灯とす、○独小庵に居住すれば造作の望なし、○我れ心仏と見るときは絵木仏の望なし、○深山に人通はざれば勤行の懈怠なし、○西方程遠といへども行者



眼前にあり、

宇田郡山居の語には、かく剃髮ていはついで以後の道徳をあらはし、在田（二ウ）郡山居の和歌には、剃髮いぜん已前の風詠をのこせり、両国のひばり山は剃髮前後の旧跡なる事、此ことのはにも見えたり、其書写し給ふ称讃浄土経は、浄土三部経なかの中、阿弥陀経どうほん同本異訳あやくの御経なり、若は書写し若は読誦どくじゆするときは、諸仏の護念ごねんを蒙り、諸願成就しゆくわんしやうじゆせずといふ事なし、此故に護念経ともいふなり、姫君九才の御時授おつらせ給ひてより、日毎に六まきをよみ給ひつゝ、猶書写の御願ましませば、十四歳の春より日毎に三巻の書写、六まきの読誦おきた怠り給はずして、終に一千巻書写し給ふてけり、此功德むなしからず、十七才の夏、当麻寺において大曼荼羅まんだらを感得かんとくし玉ふける因縁いんえん、四百十三字をもてまんだらに織付おり置せたまふ、（三才）是を織付の縁起といふなり、天平宝字七癸卯年六月十五日、御年十七才、当麻寺に蒼髪をおろして大誓願を起し玉ひ、我若生身の阿弥陀ほとけ仏を拝奉らずば門闌もんらんをいてじと、懇志こんしいるかせならざりける、さればにや、第六の日にあたる廿日の酉の刻ばかりに、独りの禅尼ぜんに忽然こつぜんときたり、百駄ひやくたの蓮糸れんしをくり、井をうがち、五彩ごさいを染そめなし玉ふけるは、阿弥陀あまほとけの化身けしんなり、同廿日余り三日の日の酉ばかりに、又独りの化女来り、亥より丑に至り三時が中に、一たけ余り五さかの曼荼羅、并糸我山に於て書写し給ふける浄土経ふくろの袋一百、ともに織なし給ひしは、観世音菩薩くわんぜおんばさつの化身なり、（三ウ）

袋一百の事織付の縁起にあり、浄土曼荼羅の出現は浄土經書写の功德に有り、此故に、此事を觀世音菩薩手づから織あらはし置給ふ、文に曰、但<sup>シ</sup>有<sup>リ</sup>二<sup>ニ</sup>浄土經書写之願<sup>一</sup>、乃<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>稱讚浄土經一千卷深<sup>ク</sup>頂<sup>ニ</sup>戴<sup>シ</sup>授<sup>ス</sup>時<sup>ス</sup>、以<sup>レ</sup>縷<sup>ヲ</sup>續<sup>ヌ</sup>百袋<sup>ヲ</sup>入<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、因には浄土經を当山に書写し、果には浄土の曼荼羅を当麻寺に感得す、紀和両国に靈場ある事是によりて知るべし、伝記に両説あり、一説は当麻寺勅筆の縁起、一説は宇田郡日張山<sup>ひばりやま</sup>の縁起なり、勅筆の縁起には紀の雲雀山<sup>ひばりやま</sup>へ捨られ給ふよしをあかし、宇田郡の縁起には宇田郡日張山へすてられ給ふとあかす、紫朱たれか知り易からんや、西山善恵国師奇瑞<sup>かんとく</sup>を感得して当麻寺に至り、曼荼羅に十冊の註記を製作し給へり、縁起段の中に於て、「(四オ) 具には流布の縁起の如しとのたまへり、是当麻記を指し玉ふにあらずや、弁釈文相抄等の如きは、当麻まんだらを釈して当麻寺縁起を用ひず、他山の縁起を信じて俗説の誤有を知らず、枝葉<sup>えだ</sup>を採<sup>と</sup>りて本源を誤る、見る人これをたゞせ、

二十三夜の暁に是を感得し給ふ、中将法如は勢至菩薩の化身なり、

二十三夜は六月廿三夜なり、六月は蓮の実のる時、廿三夜は勢至菩薩の垂跡を標す、此ゆゑに廿三夜の月を待て一心に念仏すれば、法如の護念力のゆゑに、諸願成就せずといふ事なし、法如の大願成就の日は六月廿三夜なり、是をまんだら忌といふ、法如生質<sup>うまれつき</sup>として書画をよく

し、織繡に名あり、」(四ウ)有縁に施与せんが為に、常に蓮糸をたくはへて、繡仏し給ふなどのことあり、此時機感動して、弥陀は百駄の蓮糸をくり、観音は丈余の変相を作り、見仏の宿願を成就せしむ、勅筆の当麻記に曰、化尼の言葉にいはいはく、なんじ年来仏像の為にすこぶる蓮糸を集むといへども、機感未熟せざれば、誓願むなしきに似たり、すみやかに九品の教主を拝せんと思はゞ、かさねて百駄の蓮茎を相儲べし、仏種はかならずえんより起ると云、阿弥陀仏、観音、勢至三女妹となり給ふは、片端見聞の輩は、一切の女人に至るまで、得生の巨益あらしむる本誓の重願にこたへ給ひてなり、源信僧都此地に行化して、弥陀の「(五オ)像一千駄を刻、今僅に二十駄余あり、永万元年に宗心大徳当山に住持して、大般若經一部を書写す、裏書あり、古代の曆数、靈宝の多少、自筆を用て書写して印す、文亀の頃、寺を山より里へ移す、今の得生寺なり、里名も往古は糸高とも糸鹿とも書きしを、法如十七才の夏、当麻寺に於て曼荼羅かんとくの後に、糸我とあらたむ、彼まんだらかんとくの御詠に、

糸か山我が分けそめし片糸を法の力て織り立て見ん

糸か山わがわけのぼり初しより、千巻書写の功終り、糸かの糸を引かへて、百駄の蓮糸もて、浄土のまんだらを織り立て見んとなり、是はこれ勢至菩薩の風詠なりとて、此御詠の「(五ウ)文字をもて、里名の文字をあらためけるなり、

## 糸我の十故

### 一、伊藤が嶽

姫君の御命を助け奉し所、ひばり山の北西を  
さす、伊藤は春時が姓なり、

### 一、庵の跡

ひばり山別所の谷にあり、姫君をかくし置奉る庵  
の跡なり、当寺住古の寺地、今に堂段といふ、

### 一、机の岩

浄土経書写の机とし給ふ石なり、

### 一、阿弥陀の井

ひばり山別所の谷に有り、恵心僧都千鉢仏を  
納給ふ所によりて名附なり、

### 一、経の嶮

三とせが中、書写の御経を納置給ふ所なり、」(六才)

### 一、白山権現

春時入道が廟なり、入道齒を煩ひて死す、故有て  
白山権現に祭る、齒を煩ふ人立願すれば感応あり、  
勅筆の縁起に曰、武士死す、庵のかたはらに石に巴て  
葬と云、丈四方に石を積所山頂にあり、是なり、

### 一、九重の塔

糸か峠にあり、春時が妻妙生尼の墓なり、

一、真砂寺<sup>まさじ</sup>

春時大婦剃髪之地、今の仁平寺なり、仁平年中に中興して、真砂山仁平寺とあらたむ、住古真砂寺たりし時、春時大婦此寺に剃髪して、得生妙生と号す、縁起余書にあり、今に大仏の霊像多し、

一、中将の坪

真砂谷の口<sup>くち</sup>にあり、姫君真砂寺へまうで玉ふ毎に、ゆゑありて休給ふ所、田地の字にのこりかくいふ、

一、灯畝の坪<sup>とほせ</sup>

松のあかしにて落穂を拾ひ給ふ所、是も田地の坪名にのこり、

光仁天皇宝龜六<sup>乙卯</sup>三月十四日、法如御年二十九才、宿願の如く大往生<sup>ママ</sup>だけさせ給へり、御染筆の称讃浄土經二部、同浄土三部經、御作蓮糸繡の三尊、同血盆經板木、其外当麻まんだらの写等、靈宝あまたこれあり、雲雀山中将法如縁起畢

称讃浄土經書写之地

紀州在田郡糸我莊雲雀山得生寺什記」(七才)

(白)

」(七ウ)

(B)

当麻中将姫和讃

(外題 中央)

(四周双辺子持ち枠囲い)

「(一才)

(白)

「(一ウ)

当麻中将姫和讃(内題)

きみよう たへま  
婦命当麻の曼陀羅は

ころ  
頃は人王四十五代

じやうひめ  
時の大臣横佩の

くわんおんぼさつ  
中将姫と申せしは

けしん  
観音菩薩の化身也

うば ひさ  
乳母の膝より下り玉ひ

ほんがくしんによ みやこ  
本覚真如の都なり

しやうむ  
聖武天皇の時とかや

とよなりこう むすめ  
豊成公の御息女

さい はせでら  
西国八ばん長谷寺の

たんじよう はつこゑ  
誕生ありて初声に

むか あは  
西に向ひて手を拝せ

救世の誓ひを顕して

女人往生知らせんと」

詠し玉ひて三才の

春夏冬も過ければ

四才の秋の八月に

白狐が授けし浄土経

妙養理玄に習読し

日別六巻読たまふ

五つの年の三月に

実の母上紫の

前に死別れ遊され

あぢき無き世の分別は

六つの年に継母の

照夜の前にかゝりては

うき艱難の中に又

吾子豊寿も出来し故

照夜はまゝ子の中将が

悪さも憎し中将が」

顔をみるさへあな悪と

胸の火むらをもやし立

早其内に姫君は

八つの春にもなり玉ふ

容顔美麗はゆふもさら

智恵芸能も世に勝れ

琴のしらべや箏の音も

人にまさりし愛敬を

(二才)

(二ウ)

時の帝とき みかどの孝謙帝かうけんてい

太平楽たいへいらくを奏そうせんと

簫しょうの役やくには当あたれども  
残念ざんねん口惜くちし限りなく

御年ごねん九才くさいの桃ももの春はる

照夜ていよは松井しょうせいを呼寄よて

非法ひはうの罪つみが有故あるゆへに

打捨うちすて来こと板張いたばりの

御ごいたわしく思おもへども

こしより姫君ひめぎみ引出ひきだし

継母めい君きみの命めいなれば

長ながひ刀かたなに手てをかけて

露つゆの命いのちはおしまねど

三月三日さんがつさんじつのひな遊あそひ

座ざに列てなりし照夜ていよどの

持もようさへも知しらされば  
其それより継子まごを悪にくみ初そめ」

毒酒どくしゅの難なんも逸のがれば

中將事ちゅうしやうじは父ちちの留守るす

紀伊きいの国くに雲雀ひばりへ連参つれり

輿こしへ乗のてぞ嘉藤太かとうたは

山やまに至いたれば板張いたばりの

松井嘉藤太手しょうせいかにたてについて

姫君命ひめぎみを玉たまはれと

申まをせは姫君ひめぎみの曰いはく」

日々六卷にっくろくまんの経文きやうもんを

(三才)

(三ウ)



今三巻を讀よみのこす

命いのちを延のびてくれよかし

草葉くさばをむすび手水てみづとし

經きやうを讀よんでは母上ははのうへの

また一卷の經をよみ

一卷經を讀終よみおはり

一つ蓮花に迎へやと

何卒三巻讀よみあいだ

夫それより姫君西に向き

声こゑも濁れと一卷の

菩提ぼだいの為と回向くわうして

父上現当二世の為ため

父母我身わが諸共もろともに

念仏称へ玉ふこゑ」

實げに御珠勝ごしゆじやうに存ぞんずは

松井嘉藤太ふ伏しづみ

危あやうき難なんを逃のがれても

あわれや十四の春はるの比ひ

鳥とりも通かよわぬ奥山おくやまに

都おにかはる奥山おくやまの

聞きにつけても哀あはれなり

持かたる刀なたを地ちに捨すて

御命いのちばかりは助たすけしか

照代にの悪にくみ弥やまして

紀伊の国くになる雲雀山ひばり

御ごいたわしや捨すてられて

はにふの小屋すまゐの御住居ごぢやう

これも娑婆しやばなら堪忍かんにんと

松井嘉藤太諸共に

昼は経文写しては」

夜は念仏朝夕に

迎ひ玉へや阿み陀仏

南無阿弥陀仏阿みだ仏

助け玉へや阿みだ仏

唱る声の珠勝さは

草木も涙の露をたれ

二ヶ年三月の山住居

不思議や御父豊成卿

雲雀山にて対面し

再び都に帰りても

娑婆はうきものつらき物

早く此世を離れんと

ひそかに我家を出玉ひ

十六才の秋のころ

当麻寺へと身をかくし

実雅阿闍梨を師と頼み」

緑の黒髪剃落し

綾や錦に身をかへて

きのふに替る墨染の

麻の衣になり玉ひ

極楽浄土の生身は

阿み陀如来の御姿を

拝するまでは門前に

出じと誓ひを立玉ひ

(四ウ)

(五オ)

六月廿日の夕方に

老尼らうにとなりて告玉つげひ

阿みだ如来はいを拝せんと

九十余駄よだの蓮経れんきやうを

阿みだ如来は四十余よの

汝なんち中將しゅうしやうくよ

願ねがふ心の珠勝しゅしやうなり

集おめて置おば拝めんと」

(五ウ)

御告つげ玉うせひて失玉うせふ

近江あふみ大和やま河内かはちより

染井の水につけ玉ひ

六月廿三日なる

弥陀みだは老尼と顕みれて

三把みだのわらに三升さんの

織おり上玉うへる曼陀羅まんたろの

拝ていむもまばやき体相たいさうは

其後十三年を経て

即すなはち天子てんしに奏聞そうもんし

蓮茎はらすを集め糸いとを取り

糸いとを五色そめあげに染上そめあげて

一夜三時に九尺の間ま

長谷寺はせでらくわんおん観音姫君と

油あぶらをそゞぎ灯火とうかとし

西方浄土さいはうじやうどの御莊嚴ごしやうごん

凡夫往生ぼんぶわうじやうの古郷こきやうなる」

宝亀六年卯ほうきの弥生やよひ

(六オ)

三月十四日の午の刻  
現身けんしん往生その時は  
もろとも  
諸友浄土へ帰り玉ふ

中将法如廿九才  
廿五菩薩ぼさつおんがく音楽と

明治十九年一月

版木彫刻師

本町堀筋

志保山

「

(六ウ)

(C)

和州石光寺染寺縁起

(標題)

やまとのくにかつてほりたへまのきた  
大和国葛下郡当麻北、石光寺世に染寺とよぶ、  
抑もくこのてら はじまり たづぬ  
此寺の濫觴を尋るに、人王三十九代天智天皇の御宇、此地より常に大光明を放てり、帝此こ  
とを聞召、其地を見せしめ給ふに、弥勒の三尊の形なる石ありければ、是実に靈場なるべしとて、  
勅して寺を建立し、すなはち弥勒菩薩を安置して、石光寺と号し給へり、其後百年の星霜を経て、  
四十七代淡路廢帝の御宇、天平宝字七年六月廿三日、当麻寺にて、中將法如尼公浄土の大曼陀羅  
を感じたまへり、其時一人の化尼来現し給ひ、此地の井水にて藕糸をそめ給ふに、奇なるかな、  
一色の水にて五色の糸をそめなせり、これによりて、其後此井を染の井、寺を染寺とし、党よび  
ならはせり、思ふに、先の光明は此水にて、藕糸を染べき前相にもやあらんかし、其糸をかけら  
れし桜は、往昔役行者当麻をひらき給ふ時、末代仏法興起の表示にとて、うゑ給ふ木なり、染野々  
さくらとて、其木、そのめの井いままなほ残れり、されば一度此地をふむも、なほ三惠の火坑をはな  
るべし、況や中將姫の跡をしたひて念仏するものは、決定極樂に往生せんこと疑ひなからましのみ、

(D)

中将姫由來 略縁起

(標題)

人王四十五代聖武天皇の御宇、横佩右大臣豊成公の息女中将姫、継母の妬により命を失はんとて、武士に仰て、紀州在田郡鶴山に至て害せんとす、姫君九つの歳より、母の御為浄土経毎日よみ奉る、今日はいまだ也、其程を待べしとて、三巻終て西に向ひ御手を合す、一卷は父現当二世の爲、二巻の功德を以て、母と一つ連に迎給へと御回向有、時に武士立より害し奉らんとせしか、忽に善心起て太刀を捨、庵を結び、菓、木の葉を衣食として、月日を送らしむ、後に豊成公此山に狩し給ふ、独女の草庵に侍は不審也、名のらすんは命をとらんと也、姫のいわく、我は豊成の子なり、継母の邪心により、此山になき身と成へかりしを、武士の情により、存命ぬとの給ふ、豊成親子の縁深き事を悦び、都へ伴ひ上らる、同夏の比、后に立給ふへき聞えあり、姫君無常の観念忘れず、洛中を忍ひ出、当麻寺に至り、実雅を師とし、御年十七才にして剃髪ならせ、中将法如と号す、一食長齋して七日の内に、生身の弥陀を不拝は堂内を出ずと誓願を発し、第六日西の剋に弥陀現し給ひ、極樂を拝まんとならは、百駄の蓮を用意すへしと也、姫君歡喜のあまり公

に奏問<sup>そうもん</sup>有<sup>あ</sup>しに、近江<sup>あふみ</sup>、大和<sup>やまと</sup>、河内<sup>かはち</sup>にふれへたるに、九十余駄<sup>よだ</sup>の蓮来る、則蓮<sup>すなはち</sup>の糸<sup>いと</sup>をくり、染井<sup>そめのゐ</sup>にて五色<sup>しよくじよ</sup>となし、人王<sup>にう</sup>四十六代孝謙<sup>こうけん</sup>天皇御宇、天平宝字<sup>へいほうじ</sup>七<sup>癸卯</sup> 六月廿三日亥子丑の間に、千手堂<sup>せんじゆどう</sup>へ化女<sup>けによ</sup>、織女<sup>しよく</sup>来現<sup>らいげん</sup>し給ひ、糸<sup>いと</sup>を執<sup>とつ</sup>て堂<sup>どう</sup>の乾角<sup>いぬいのすみ</sup>に寄<sup>よ</sup>て、一丈五尺の曼陀羅<sup>まんだら</sup>を織<sup>おり</sup>顕<sup>あらは</sup>す、化女<sup>けによ</sup>は弥陀<sup>みだ</sup>、織女<sup>しよくじよ</sup>は観音<sup>くわんおん</sup>、曼陀羅<sup>まんだら</sup>は阿弥陀浄土<sup>あみだじやうど</sup>の変<sup>へん</sup>繒<sup>さう</sup>也、縦使<sup>たとひ</sup>未来世<sup>みらいよ</sup>に於<sup>お</sup>て片端<sup>へんたん</sup>の見聞<sup>けんもん</sup>すといへとも、一仏土<sup>いつぶつど</sup>におゐて浄業<sup>じやうがう</sup>の主伴<sup>しゆはん</sup>ならん、

中将姫<sup>ちやうけい</sup>二十九歳、光仁天皇宝龜<sup>ほうき</sup>六<sup>乙卯</sup> 年三月十四日午の時、現身往生、廿五の菩薩御来迎、今の練供養<sup>ねりくやう</sup>是なり、

(筑波大学名誉教授・元文教大学教授)

(A) 『雲雀山中將法如緣起』

(一二丁才)



(一二丁ウ)

紀の國在田郡雲雀山人皇四十五代聖武帝の内宇櫛佩  
の右大臣豐成公は雅君中將の母侍十三れ時佳母公の  
まらけりや奈島都より捨さるるく云々中ふ松後淨  
土經一千卷書写々々回源より雅君九才の辰附如幻々本山地  
獄を捨さるるいふ物にりてなかに十二の辰附和州と云  
々々紀のむらり山捨らるるは紀の國ひより山へ南に松野北に  
芳野とる人跡なきやうに雅君の如くは兄停夏時  
辰今と助より此本の巻と結び密に都れ書と云々ま尋常と  
けまふ思ひく養育しよりけりて雅君十四歳の春の夜  
春月が月し重き病を患くむらくむらけりまふ雅君九才の

初時悲母の死處より捨らるるは松後淨土經一千卷書写の  
辰願よりほでふ人々を附さるるく本根石上と云々  
書写の辰願よりけりて雅君十八歳の辰附又豐成公け山へ捨  
あふさるるくも雅君は對面して再び都を去るは後を  
元上麻布其れはほせ一巻の縁つひにやれ舊金と賦  
獨生寺と云はけり雅君の辰缺二首なり

あつづくに山の奥よりけりては早來人々を捨らるるは  
素う山へうりふんゆり紅まむと秋の缺れ汚るけり  
系り稻荷の記に曰廿七代孝德天皇自白雅年中に山  
より社を里ふ移りて系鹿社と稻生社といひてり

(一二丁オ)



(六丁ウ)

一 白山権統

春時入道が廟より入道出と形似て死に故をて  
白山権統ふちと萬と稱ふ人主とされ威威なり  
勅筆の鑑起と曰成士死と虎のやうに石よ色と  
葬と云々又四方に石と獲て山頂より是なり

一 九重の石塔

赤う峰より上向か素妙堂凡の墓なり

一 真妙寺

春時史録判官の地今に仁平寺なり仁平年中  
中興して真妙山に平とくつたに怪古とゆふなり  
一内長閑と稱ひ寺に判官とて養生妙と云々  
鑑起除書ふらう今に大井の末孫なり

一 中時の坪

真妙堂の口あり雄若と妙と云ふので初人を  
ゆふらうと云ふ人新田地に雲にのちから

一 灯籠の坪

松の形かして藤橘と拾ひう新夏も田段の  
坪なりと云ふ

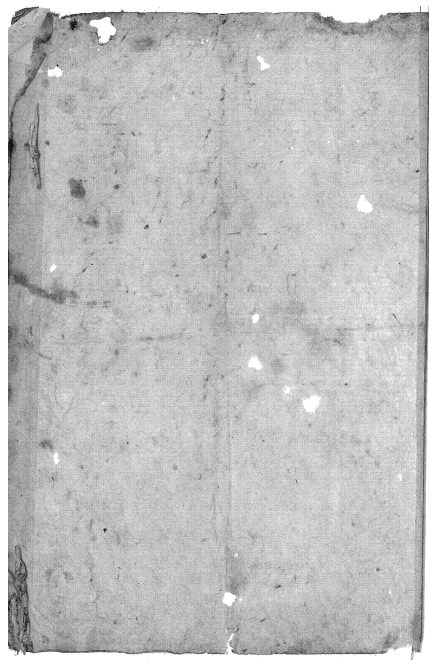
先に天皇寶龜六乙卯三月十四日は如浄年二十九名石鏡  
の如く大鏡生とけとせとて浄源筆の稱讃浄と注二部  
同浄と三部経浄作蓮系續の三篇同血盆経は注別  
當麻とんどの等實證と云ふ是なり  
當麻山中時法如縁起并

稱讃浄土經書寫之地

紀州在田郡永義莊當麻山得能寺付記

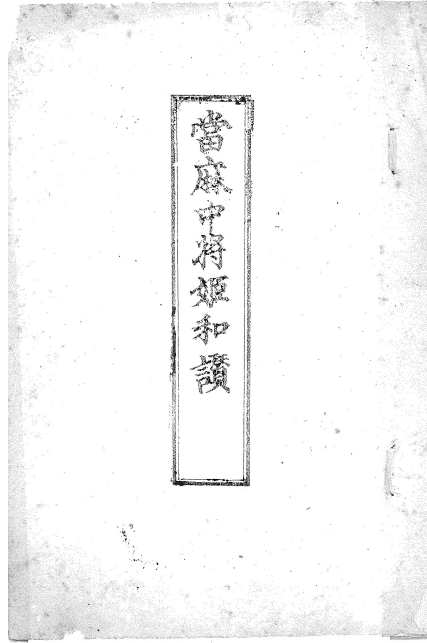
(七丁オ)

(七丁ウ)

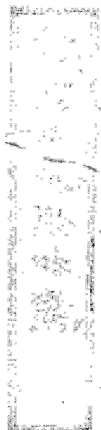


(B) 『當麻中將姫和讃』

(二丁才)



(二丁ウ)



當麻中將姫和讃

倭命當麻の要隘を  
 頃々人王四十五代  
 時の大臣様倭乃  
 中將姫と申や  
 觀音菩薩の化身  
 乳母の膝より育ち  
 救世乃誓ひを  
 女人生まれんと  
 本覺真如の御あり  
 聖哉天皇の時とや  
 豐成公比所島女  
 西園公乃長谷寺の  
 秘室より不寐初ふ  
 西に向ひて身を移せ  
 女人生まれんと

(二丁オ)

三月十四日の年の刻  
 親身澄生をの時を  
 移る澄生の時を  
 中將法如廿九日  
 廿五嘉慶元年と

明治十九年一月

版木彫刻師

本町堀筋 志保山

(C)『和州石光寺染寺縁起』

[illegible]

(E)(ア)『大和國葛下郡二上山當麻寺略縁起』

大和國葛下郡二上山當麻寺略縁起

牛當奇 撰行者傳法興隆最初ノ靈地なり  
 天武天皇御宇 白鳳年中に七堂伽藍を建立し  
 勅願所とあさむ 孝謙天皇御宇 宇賀郡石上宮盛成公の  
 女中將姫天平實子七年に遷す 今人々をりてなり 其  
 とき 一は如比五尼と名づく 時大菩薩と名をてて 回報  
 其河津油曲集と名づらん 道場をせし 也 一七日の満ち  
 に 一人は五尼乃形治に 敬慕とあり 治も惡女の言を  
 信ぜず 治は爲りて 女にあらむ 又治が 治に 治を相と  
 繼行は 繼の 八と 思ふ 難本と 女 傳を 同  
 弥陀觀音に 治ひ 伯蓮の 志を 治く 女 也 一の 一 女  
 治は 九品大曼多羅と 繼あり 治し 今 閑帳ノ 曼多羅  
 曼なり 曼惡心 傳中 將姫ノ 厚信を 感 治 治の  
 女 ことば 二五菩薩の 面を 造す 正月十日 定極念夜  
 如治 菩薩を 迎へ 繼ひ となり 毎年 拜集し 世々 人乃  
 ろ 如入 祈り 供養と あり 也 實は 古曼多羅の 面なり  
 一 治一 之 親傳を 傳 治 一 治に 一 直は 聖者の 妙工  
 と 傳見と あり 實は 乃 菩薩 治なり 時 女 一 女 隨書し 傳  
 傳乃 勝因と 損 一 女 一 女 傳記略し 一 女 一 女



